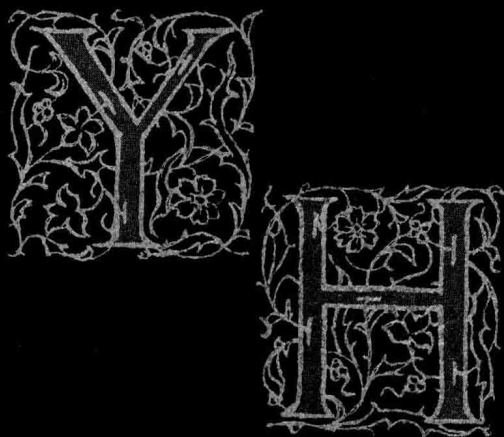


わたしは椿姫
平岩弓枝

わたしは椿姫
平岩弓枝





わたしは椿姫

880円

第1刷発行 昭和54年8月20日

第2刷発行 昭和54年10月16日

著者 平岩弓枝

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。 © 1979 平岩弓枝

0093-306281-2253 (0) (文2)

Printed in Japan

わたしは椿姫

目次

南の国の花嫁さん	5
わたしは椿姫	41
二度、売る方法	79
東は東 西は西	115
日本 にっぽん より日本 にっぽん	151
カナダからの手紙	187
大陸横断列車の女	223

装幀 淡谷一郎

南の国の花嫁さん

高松あづさが東南アジアのその国の小さな都市へ旅立ったのは、十月はじめの、急に秋らしくなった朝であった。

観光旅行ではなかった。

六月に結婚したばかりの新妻が、一足先に現地へ赴任した夫の許へ行くためのものである。まず、むこうへ行けば、早くても二、三年は帰国出来ない。

空港へ見送りにきてくれたのは、たった一人の肉親である弟の狩野健介と、あづさが結婚まで、お手伝いとして働いていて、結婚後も昨日まで厄介になっていたロレンス家の老夫妻だけであつた。

「あづさ、体に気をつけて、なにかあつたらすぐ手紙を書きなさい。一人で辛抱してはいけません」

ロレンス夫人は何度もあづさを抱きしめて別れを惜しみ、二歳年下の弟の健介は、
「義兄^{にい}さんが待ちかねているよ」

と姉を冷やかした。

空の旅の出發は慌しく、搭乗アナウンスにせき立てられて、空港バスに乗り、國際線のタラップを登ったのだが、羽田空港の滑走路を機体が離陸して、眼の下に広がっていた京浜の街がやがて遠ざかると、あづさは急に心細くなった。

恋愛結婚には違いないが、結婚して五日目に東南アジアへ赴任して行つたまま、三ヵ月も逢っていない。

多くの場合、現地勤務の者は、当人に適性があるかどうかのテスト期間として二、三ヵ月は單身赴任とし、その後に家族を呼びよせるといふケースが多い。

高松志万夫の場合もそうで、そもそも、六月にいそいで結婚式を挙げたのも、志万夫の外地勤務が決まったためであつた。

機内には新婚らしい何組かが乗っていた。

ベナンあたりへのハネムーンかも知れないと思い、あづさは、ふと、彼らが自分のことを不思議そうに眺めているのに気がついた。

膝の上に、ロレンス夫人から渡された花束を持っている。が、一人であつた。服装は、地味好みだから、やや明るいグレイのポリエステル地の布地で仕立てたパンタロンスーツに、同じようなシルバークレイに細いピンクの縞が入ったシャツブラウスである。長い髪をひとまとめにして、後頭部でひつつめた単純なヘアスタイルは清潔で、あづさを年齢よりも若くみせていたが、新婚旅行組は、いったいどういう旅立ちか想像も出来ないでいるらしい。

あづさは、窓から雲ばかりを眺めた。

自分に、こんな日が訪れるとは、夢にも思っていなかった。

十五の年に、両親を一ぺんに失ってから、結婚をあきらめてしまったようなところがあった。

そのことを特に悲しいと思ってもせず、生きて来たつもりだったが、二十二、三の頃は人知れず、涙を流したこともあった。

高松志万夫は、一番、つらい時期を通り越して、あづさが再び、結婚について諦念を持ちはじめた頃に知り合った。

最初から印象はよかった。だが、あづさは彼を決して好きにはなるまいと考えていた。

そんな意識をしたのは、すでに志万夫に好意以上のものを抱いていたからに違いない。

二十八歳になって、あづさは、はじめて恋をして、その恋は結ばれた。

目的地へ到着するまでの間、あづさは花束をスチュアデスにあずけて、せっせとレースあみをしていた。

少しも、ぼんやりしていることの出来ない性分は母ゆずりでもあったし、これまでのあづさの生活環境にもよるものであった。

到着したのは、現地時間で夕方であった。

日本とは二時間少々の時差である。

機内から出ると、やはり暑かった。それでも、風はさわやかである。

ターンテーブルから荷物をとって通関を出ると、志万夫が立っていた。

黙って、あづさの肩を抱くようにして歩き出す。

「車を持ってくるから……」

最初にいった言葉が、それで、あづさは黙ってうなずいた。

気のきいたことは、言えもしないし、手紙にも書けない照れくさがり屋だと、よくわかっている。別に、なにもいわなくとも、志万夫が、どんなに自分を待ちかねていたかは、彼の少し上気した顔や、躍るような足どりでもうわかつていた。

合歡かかんの花が咲いていた。

気がついてみると、ハイビスカスもブーゲンビリヤも夕闇の中にかたまっている。

南の国へ来たのだという想いが、あづさを包んだ。

新居は、やや小高いところにあるマンションの五階であった。

あたりは熱帯樹に囲まれた大邸宅や植物園があつて、環境は良すぎるほどである。

「随分、あっちこっちみて廻つて、ここに決めたんだ。家賃はやや高いんだが、バスの便がいいし、スーパーマーケットにも、まあ近い。静かだし、建物も新しいし……」

居住しているのは、殆んどが英国人とアメリカ人で、日本人も一組、入っている。

「日本人が多すぎても、なにかと厄介だそうだ、といって、全く、日本人がいなくても寂しいんじゃないかと思つてね。なにかあつた時、やっぱり助けになるのは日本人同士だと思うから……」

六階にいる佐々木という夫婦は建設会社勤務しているという。

「五歳になる男の子がいてね。あとで、ちょっと挨拶に行つたほうがいいかも知れない」

マンションは、日本のと違って遙かに部屋が広かった。

ゆつたりした寝室は、セミダブルのベッドを二つ並べても、まだ余裕がある。

「ロレンス夫人が、ベッドは部屋が広かったら、贅沢ぜいたくでもセミダブルをツインにして使ったほうがいいと教えてくれたから、その通りにしたんだよ」

このマンションへ移って、ちょうど一週間だが、

「一人で、寂しかったな」

ひょいとあづさを抱いて耳許にささやいたのが、そのまま二人だけの夜になった。

翌日は、日曜日で、とりあえず、手土産を持って志万夫の上司の家を訪問した。

マンションではなく、一軒建で、色の浅黒い中年のメイドを使っている。

「子供が二人とも進学をひかえていてね。東京の、僕の両親の家へあずけてあるんだよ。それで、家内は毎月のように行ったり来たりで……」

目下、やもめだと支店長は笑っていた。

「家内が帰って来れば、おそらく一緒にいるだろうが、ここには外地勤務の日本人の奥さん方のサークルがあつてね。なでしこ会というんだが、時々、集って親睦会をやったり、慈善バザーや奉仕などをやっているそうだね。高松君の奥さんも、早速、入会することになるだろう」

そんな話をしてから、支店長があづさに訊ねた。

「奥さんは、語学のほうはどうですか」

「ほんの少しでございます。日常会話程度のことです……」

ロレンス家で五年以上、英会話はみっちり仕込まれたし、あづさも独学で勉強した。

ロレンス夫妻は、日本語をほんの少し喋るけれども、来客の九十パーセントは英語だけしか話せない。

ロレンス家で働いていたあづさにとって、英会話は必要欠くべからざるものであった。

「そりゃ、たのもしいな」

外国に住んで、なによりのハンデは語学力だと支店長はいった。

「多くの奥さん方の中には、全く、英語が不得手の人がいる。俄か勉強でもないよりはむしろ、それすらもしないで、従って、日本人としかつき合えない。どこへ行くにも日本人だけがたまって……いやそれは、なにも奥さん方に限らないけれども……とかく、女は男より口がうるさいから、ああでもない、こうでもない……あづささんは若いから、当然、嫁いびりをされるかも知れないな」

まあ、しっかりたのみますと支店長は、あづさをはげましてくれたが、その時のあづさは支店長の言葉を、ちょっとした冗談程度にしか認識しなかった。

同じマンションに住む佐々木家を訪問したのは夕方であった。

プザーを鳴らすと、顔を出したのは主人の佐々木良一で、サロネプロンをかけて食事の仕度をしている最中である。

「女房が、なでしこ会で出かけていまして……」

部屋では男の子がこれ以上、散らかせないと思うほど、乱雑に玩具を出して遊んでいる。

早々に、挨拶をすませて、あづさ達は引揚げた。

二

半月は、忽ち過ぎた。

あづさにとっては、ロマンティックで平穏な新婚生活であった。

日曜は夫婦そろって足りない家具をみて歩いたり、時には郊外までドライブに出る。

週日のあづさは夫を送り出してしまうと、午前中に家事を片づけて、午後はもっぱらレースあみだのミシンを踏んでいることが多かった。

テーブルかけにはじまって、ベッドカバーまで、あづさは自分で作っていた。

二日に一度の割合で、バスでスーパーマーケットで買い物をする。

言葉には全く不自由はなかったし、食物は日本にくらべてずっと安い。

少々、わずらわしかったのは、六階に住む佐々木夫人であった。

挨拶に行った時は、なでしこ会に出かけていて留守だったのが、翌日、あづさが部屋を片づけている時に、ふらりとやって来た。

「昨夜は失礼いたしました。出かけて居りましたもので……」

そんな挨拶ではじまってリビングへ通ると好奇心たっぷりに部屋中をじろじろみて、

「奥さま、まだ、家具がおそろいじゃないみたいですけど、これからお買いになるのなら×××

通りのA商会がよろしいわよ。なんでしたら、御紹介しますわ……」

といい出した。

「まだ、一ときには買えませんので、ぼつぼつ揃えて参りたいと存じます。その節はお世話になるかも知れません」

当りさわりのない返事をしておいたのに、早速、午後になるとA商会の名刺を持ったのがやって来て、変な日本語でいろいろいったあげく、カタログをおいて行った。

志万夫が帰って来てから、二人でカタログをみたが、アメリカ人なみの派手なものが多く、二人の趣味に合わなかったし、それとなく、二人でA商会のウィンドウものぞいてみたが好ましいものもなかったので、

「当分、必要ないから……」

と断ってしまった。

むしろ、照明器具一つでも、サイドテーブルでも、夫婦で町を散歩しながら、これというのをみつけて、少しずつ揃えて行くのが楽しかった。

ところが、A商会を拒否したことで、まず佐々木夫人は機嫌が悪くなった。もっとも、表面は、そのことについて文句もいわないし、二日に一度は遊びにやってくる。

「退屈ですわね。お話相手にお邪魔しましたのよ」

と佐々木夫人はいうが、あづさのほうは退屈どころではなかった。夫が買って来てくれたこの都市の歴史を書いたものや、この地方を舞台にした小説なども、まだ、読み切っていないし、レ